

『慶陵』契丹文字接尾語表の属格語尾

吉池孝一

1. はじめに

呉英喆 2007 は、契丹小字の原字 222(文字番号で表記する¹。以下同様)を属格語尾とする早い文献として愛新覺羅 2004 を紹介し自らも原字 222 を属格語尾と結論しその音価を[nɔ]とする²。これは比較的新しい契丹小字研究の成果である。そこで『慶陵』(1953年3月刊行)に付された「接尾語表」(小林・山崎・長田 1953)を検討すると、既に原字 222 を属格語尾と認識し音価 nu を付していたことがわかる。小稿は、このことを通して「接尾語表」の検討が今なお有用であることを示そうとしたものである。

2. 「接尾語表」

『慶陵』に附された「接尾語表」は、契丹小字で綴られた契丹語の語幹と「接尾語」を提示し、接尾語の幾つかについて音価を付したものである。契丹小字は文字成分である「原字」をハングルのように左右上下に組み合わせて単語を表記するわけであるが、単語中の変化しない部分を語幹、変化する部分を接尾語と想定して単語を配列したものがこの「接尾語表」である(図表 1 参照)。「接尾語表」の右下には次の説明がある。

本表は慶陵出土の四種の契丹字哀册中より、契丹字契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なるものを摘出して、分類表示したものである。ただし類例の豊富でないものは省略した。各字の出典は、興宗哀册文 A, 仁懿皇后哀册文 B, 道宗哀册文 C, 宣懿皇后哀册文 D なる略號をもつて、各字の下に示した。なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製)

表の構成や内容について一切説明はなく、接尾語の機能や音価推定の根拠などについては、

¹ 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 中の契丹原字の文字番号で原字を代用表記する。

² 呉英喆 2007 「小組提出契丹小字中有表示領格意義的 127[an]、140[ən]、18[in]、154[ɔn]、273[un] 等附加成分。這些看法得到了契丹小字研究界的贊同。但是有的音韻學家對以上格附加成分不以爲然，根拠契丹人人名用語詞尾，認爲契丹語有*-n 和*-in 兩個名詞附加成分。後來，有人還提出 222、339 也表示領格，而且對其他領格的擬音也與研究小組有所不同，認爲 140、127、273、154、251、222、18 讀*-n^④。／④愛新覺羅・烏拉熙春：『契丹語言文字研究』，京都大學東亞歷史文化研究會，2004 年 5 月，123-146 頁。」(34 頁)。

同 2007「再說 222 雖然也是表示領格意義的附加成分，但結合許多用例可以看出，它和 127[an]、140[ən]、18[in]、154[ɔn]、273[un] 很難構成互補關係，可能屬另類輔音開頭的領格附加成分，其讀音擬爲[nɔ]。」(52 頁)。

3. 属格語尾 ni

図表1の「0の一」すなわち原字 140 が属格語尾と認識されていたことについては、吉池 2011b で述べ、以下の二点を確認した。

- 一、「接尾語表」の著者は原字 140 が契丹語の属格語尾であることを表の作製に先立って知っていた。そして、この確実な例を座標軸として表の最初に置きこの語尾が付されたものを名詞語幹あるいは名詞的語幹として配置した。
- 二、原字 140 が表わす契丹語の属格語尾の音価を推定するに際して、村山 1951 の対音対訳資料による推定音価および A. de. Smedt-A. Mostaert 1945 のモンゴル語(土族語)の属格語尾の音の両者を参照し、音価 ni を付したと想定して矛盾はない。

第一番目の原字 140(ni)を属格語尾と認識していたことは『慶陵』の本文で述べているから確実であるが、第二番目の原字 222 の機能がどのようなものであるか問題となる。

4. 属格語尾 nu

表の第一番目の接尾語すなわち原字 140 を属格語尾と認識していたことは『慶陵』本文中の「第四節 契丹文字の哀冊」にあるが、他の語尾の機能については一切触れない。しかしながら、「接尾語表」の説明に「なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。」とあるからには、少なくとも音価が付されたものについては、中世蒙古語との比較を通して、その機能も推定されていたとみてよいであろう。残念ながら説明は一切無く、どのような機能が推定されていたかということについては、表の構成や現に付されている音価から見定めるしかない。そこで第二番目の接尾語すなわち図表1の「0の二」の原字 222(nu)はどうであるかということ、表の構成や音価など以下の三点から見て、第一番目の原字 222 と同様に属格語尾と認識していたと認めてよいであろう。

一、配置より。「接尾語表」の右下の説明に「本表は慶陵出土の四種の契丹字哀冊中より、契丹字契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なるものを摘出して、分類表示したものである。」とある。「名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等」を配したとあるが、第一番目の接尾語が属格語尾(ni。原字 140)であることは間違いの無いことであるから、初頭部分に各種の名詞曲用語尾を配したことは認めてよい。表の作製にあたって同類のものをまとめて配すことは通常に行われることであるから、第二番目の接尾語すなわち原字 222 も属格語尾として配したと見ることも可能である。

二、分布より。第一番目の属格語尾(ni。原字 140)と第二番目の接尾語(nu。原字 222)は、ほぼ補い合う分布となっている。図表1の一行目、すなわち「零の1、2、3・・・」は語幹であり総数 147 となる。147 の語幹と上記二種の接尾語の結びつきをみると次のとおり

である。

1. ni	33. ni	65.
2. ni	34. ni	66.
3. ni	35.	67.
4. ni	36.	68. ni
5. ni	37.	69. ni
6. ni	38.	70. ni
7. ni	39. ni	71. ni
8. ni	40. ni	72. nu
9. ni	41.	73.
10. ni-nu	42.	74.
11. nu	43.	75. ni
12. nu	44.	76.
13. nu	45.	77.
14. ni	46.	78.
15.	47.	79.
16. ni	48.	80.
17. ni	49.	81.
18. ni	50.	82.
19.	51.	83.
20.	52.	84.
21.	53.	85. nu
22.	54.	86.
23.	55.	87.
24.	56.	88.
25.	57. ni	89.
26.	58. ni	90. nu
27. ni	59.	91.
28. ni	60. nu	92.
29.	61.	93. nu
30.	62. nu	94.
31.	63.	95.
32. ni	64.	96.

97.		114.		131.
98.		115.		132.
99.		116.		133.
100.		117.		134.
101.		118.		135.
102.		119.		136.
103.		120.		137.
104.		121.		138.
105.	nu	122.	nu	139.
106.		123.		140.
107.		124.		141.
108.		125.	nu	142.
109.	nu	126.	nu	143.
110.		127.		144.
111.	nu	128.		145.
112.		129.		146.
113.		130.		147. nu

10 において属格語尾の ni と接尾語の nu が対立するけれども、それ以外は両者補い合う分布となっている。これを、機能を同じくする語尾が何らかの条件に抛り二種の音形となって現れて補い合う分布となっていると解することができるし、「接尾語表」の著者も、そのような事を想定して両者を配置したと見ることも可能である。

三、音価 nu より。「接尾語表」は原字 222 に nu という音価を与えるわけであるが、これが何によってなされたか問題となる。「接尾語表」の説明は「なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。」とするが、nu という音価を中世蒙古語との比較のみによつて付すことは困難であり、何らかの対音対訳資料によつたとみななければならない。その対音対訳資料は何であったか。原字 222 を含む 222・186 が、漢語の十二支の「戌」に相当することは羅福成 1934 によつて明らかにされており、戌に相当する犬を契丹語で「捏褐」と漢字音訳することも知られていた³。白鳥 1910-1913 は契丹語の帰属を論ずるにあたり、この漢字音訳語の「捏褐」と

³ 『遼史・国語解』に「捏褐耐 犬首也」とある。「大」は「犬」の誤。

蒙古諸語の *nogai*, *nokhòi* (犬) などと比較した⁴。以上をみるならば、原字 222 の音価を音訳漢字の捏もしくは蒙古諸語の *no* によって推定することに無理はない。早くは山路 1956:53 が蒙古語 *nokhai* (犬) と比較して原字 222 に *no* の音価を与えた。契丹文字研究小組 1977:64 は原字 222 を *nə* とした。これは蒙古語の *nohai* (犬) の *no* および *n*, *ən* に対応する他の漢字音訳語によるものである⁵。それを引き継ぐ清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985:110 も *nə* とした。その後、清格爾泰 2002:69-70 は *noqai* (犬) などの蒙古語と比較し *no/on* と改め、呉英喆 2007:51-52 も *noqai* (犬) と比較し [*nɔ*] とした。

そこで「接尾語表」の原字 222 であるが、現に推定されている *nu* という音形からみて「接尾語表」の著者も犬を表わす蒙古諸語によったとして大過はないであろうし、それ以外の根拠を見つけ出すことは困難である。この点につき「接尾語表」の著者の一人である長田夏樹氏は、長田 1951 において犬を意味する漢字音訳契丹語の「捏褐」(音形を *nie' -xə'* と再構成する)を蒙古諸語と比較し、華夷訳語甲種本の那孩(*no-qai*)、蒙古文語の *noqai*、ダグール語の *noγo*、モンゴル語の *noχue*、シラ・ユグール語の *nohué* を挙げる。原字 222 は、音訳漢字によるならば *ne* のような音形とすることができるし、蒙古語系の諸語によるならば *no* のような音形とすることができるということになる⁶。このようにして *ne*, *no* という音形を求め、次いで漢字音訳中世蒙古語の名詞曲用語尾と比較し、*-n* 子音に後続する属格語尾の *u/ü* を表記するために「訥(*nu*)」という漢字が使用されていることを確認し⁷、それにより *no* という音価にしたがって属格語尾としたという経緯が想定される。なお「接尾語表」に付された母音をみると *a*, *i*, *u* の三種のみであるから、*a*, *i*, *u* は男性母音と女性母音を一括表記したものであり⁸、さらに *u* については広狭の円唇母音をも代表した表記とし

⁴ 白鳥 1910-1913 「(三五) 捏褐 契丹語にて犬を捏褐といひしことは、上に引用せる例證に見えたり。さて蒙古語族の中、長城附近の蒙古語にて犬を *nogai*, *khalkha* 語にて *nokhòi*, *Ölöt* 語にて *nòkhòi* (Klap. : *A. P.* p. 279)、*Buryat* 語にて *nokhoy* (Podgorbunski. p. 285. a) といへば、契丹語の捏褐は此言の對音なり。」(白鳥庫吉全集第四卷 265 頁)

⁵ 『遼史・營衛誌』に、「孝」の漢字音訳契丹語として「赤實得本」がある。「本」の韻母もしくは韻尾が原字 222 に相当するという。

⁶ 音訳漢字の「捏」が示す近世漢語音と現代の蒙古諸語の隔たりは大きい。蒙古諸語によって *no* などの円唇母音を想定するということであるならば、この矛盾を説明しなければならないが寡聞にしてそれがなされているとは聞かない。

⁷ 吉池 2011b 参照。『元朝秘史』および『韃靼館譯語』(甲種本華夷訳語)の属格語尾をみると概略次のとおりである。①母音で終わる語幹には「因」を付す。②*-n* で終わる語幹には「訥」を付す。語幹の *-n* と属格語尾を合わせて「訥」で表記する場合と、語幹の *-n* を重複させて *-n+*「訥」と表記する場合がある。③*-n* 以外の子音(*-c*)で終わる語幹には「*c+un*」の音を持つ音訳漢字を付す。たとえば、「*l+un*」倫、「*m+un*」門、「*d+un*」敦など。

⁸ 『慶陵』本文の「第四節 契丹文字の哀冊」に「契丹語には母音調和がなかったとは断定できないが、すくなくとも契丹文字は、母音調和を厳密に表記していないといえることができる。」(264 頁)とある。これは田村・小林 1953 の記述であるが、小林・山崎・長田 1953 の認識でもあつたはずである。

て/o, ɔ, u, ü/に相当するものであろう。

以上の一、二、三を個別に見るならば根拠とするのは難しいものもあるが、この三点を総合して見るならば、「接尾語表」の著者は原字 222 を原字 140 と同様に契丹語の属格語尾と見なしていたとすることができる。

5. おわりに

「接尾語表」は不思議な作品である。考古学の小林行雄氏、蒙古語学の山崎忠氏、契丹・女真語および広く一般言語学に通じた長田夏樹氏の名を冠した成果であるが、三氏の関与がどのようなものであったか明瞭でなく、著者による表についての詳しい説明も欠いているため評価することが困難である⁹。そういうこともあっての故であろうか、『慶陵』は恩賜賞の対象となったけれども、この表については中国の契丹文字研究グループが言及するまでは埋もれたままの状態にあったように見える¹⁰。それは現在においても大きく変わることはない。しかしながらこれまでの議論が正しいとしたならば「接尾語表」の著者は 1953 年という早い段階で原字 222 を属格語尾と認識し音価 nu を付していたことになる。これは愛新覺羅 2004 や呉英喆 2007 などの比較的新しい契丹小字研究の成果と一致する¹¹。そうであるならば、「接尾語表」は 58 年も前のものであるが、解読が進んだ現在においてもなお有用と見なし得る部分を含むということになる。もっとも、「原字 222 が属格語尾であり音価は nu に類するものである」ということの是非は別に検証されなければならない。

〈参考文献(発行年順)〉

- 白鳥庫吉 1910-1913. 「東胡民族考」, 『史學雜誌』21-24 編。『白鳥庫吉全集 第四卷 塞外民族史研究 上』(東京:岩波書店 1970 年, 63-320 頁)所収による。
- 羅福成 1934. 「道宗仁聖皇帝國書哀冊考」, 『遼陵石刻集録』第卷四、國立奉天圖書館編。『遼金元語文僅存録第一冊 遼陵石刻集録』(羅振玉輯、台聯國風出版社、1974 年) 所収による。
- A. de. Smedt et A. Mostaert. 1945. *Le Dialecte Monguor, II^e partie: Grammaire*, Peking. (1964, Uralic and Altaic Series, Indiana University).
- 村山七郎 1951. 「契丹字解読の方法」, 『言語研究』第 17・18 号, 47-70 頁。

⁹ 「接尾語表」成立の経緯については吉池 2011b を参照されたい。

¹⁰ 早くは契丹文字研究小組 1977 で言及されている。

¹¹ 愛新覺羅 2004 「222 *-n 222 作為屬格後綴的用例就可以確定意義的範圍內亦較少見。其接續對象主要是 u, ə, i 元音及復數後綴兼方位後綴 254。」(128 頁)。呉英喆 2007 「再說 222 雖然也是表示領格意義的附加成分, 但結合許多用例可以看出, 它和 127[an]、140[ən]、18[in]、154[un]、273[un] 很難構成互補關係, 可能屬另類輔音開頭的領格附加成分, 其讀音擬為[nɔ]。」(52 頁)。

- 長田夏樹 1951. 「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」, 『神戸外大論叢』第 2 卷第 4 号, 40-66 頁。
- 田村實造・小林行雄 1953. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は 1953 年、下巻圖版冊は 1952 年発行。
- 小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊)田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。
- 山路広明 1956. 『契丹制字研究』アジヤ・アフリカ言語研究室。
- 中国社会科学院民族研究所・内蒙古大学蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『内蒙古大学学报』1977 年第 4 期契丹小字研究專号。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。
- 清格爾泰 2002. 『契丹小字釋讀問題』東京外国語大学アジヤ・アフリカ言語文化研究所。
- 愛新覺羅烏拉熙春 2004. 『契丹語言文字研究』京都市: 東亞歴史文化研究會。
- 吳英喆 2007. 『契丹語静詞語法範疇研究』呼和浩特市: 内蒙古大学出版社。
- 吉池孝一 2011a. 「長田夏樹氏と契丹小字研究」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第 98 号, 13-20 頁。
- 吉池孝一 2011b. 「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』古代文字資料館, 90-107 頁。